

# プログラミング言語

## 演習IV

2023年7月21日

前橋工科大学 生命情報学科

中村 建介

# アルゴリズム

数値計算

サーチ、ソート

ツリー構造・グラフ

再帰

まず素直なコードを書く

それでも遅いとき → 対策を考える

システムに依存

1. コンパイルオプション(-O3)
2. 組み込み関数を使う

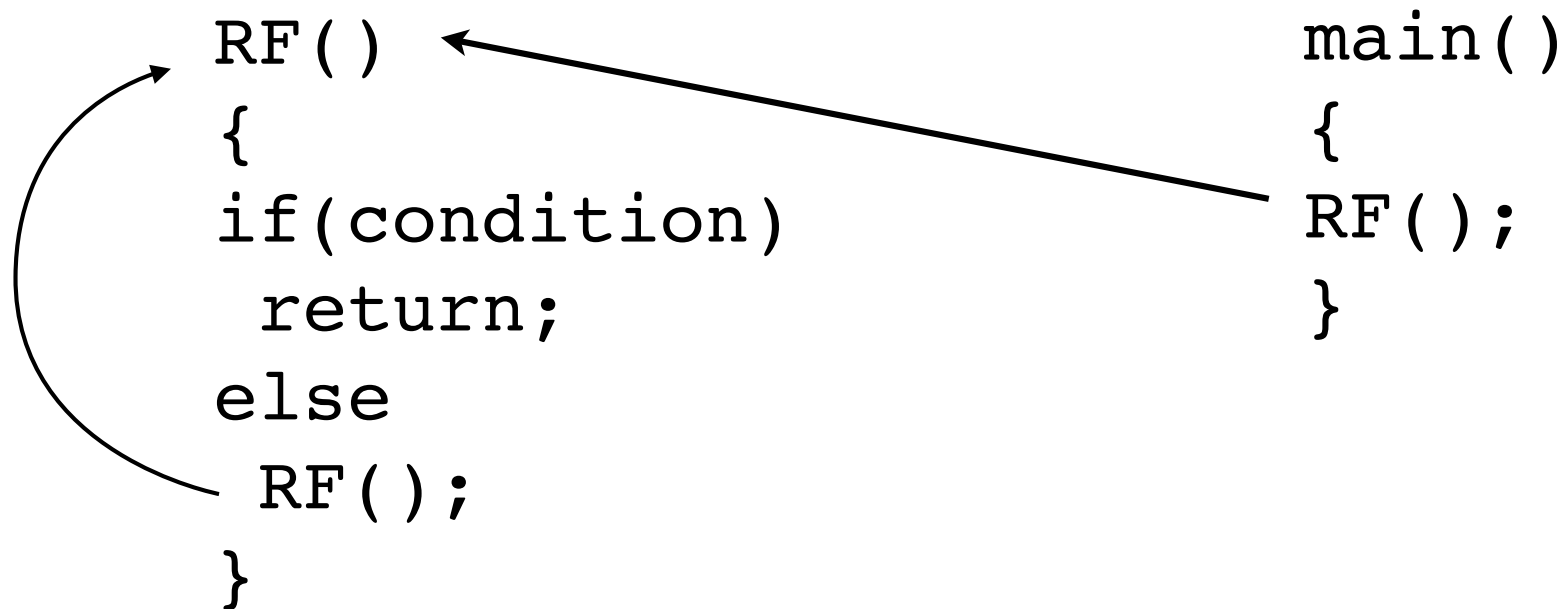
アルゴリズムの工夫

1. 計算量を減らす
2. 計算機の気持ちになる
3. 全く違う発想・視点
4. 並列化

# 再帰関数

Recursive

自分自身を呼び出す関数





# 階乗

$$n! = \begin{cases} 1 & (n=0 \text{ のとき}) \\ n \times (n-1)! & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

```
long  kaijo(long n)
{
    if(n==0)
        return (1);
    else
        return(n*kaijo(n-1));
}
```



$$4! = 4 \times 3 \times 2 \times 1$$

$$n! = \begin{cases} 1 & (n=0 \text{ のとき}) \\ n \times (n-1)! & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

$$4! = 4 \times 3!$$

$$= 4 \times 3 \times 2!$$

$$= 4 \times 3 \times 2 \times 1!$$

$$= 4 \times 3 \times 2 \times 1 \times 0!$$

$$= 4 \times 3 \times 2 \times 1 \times 1$$

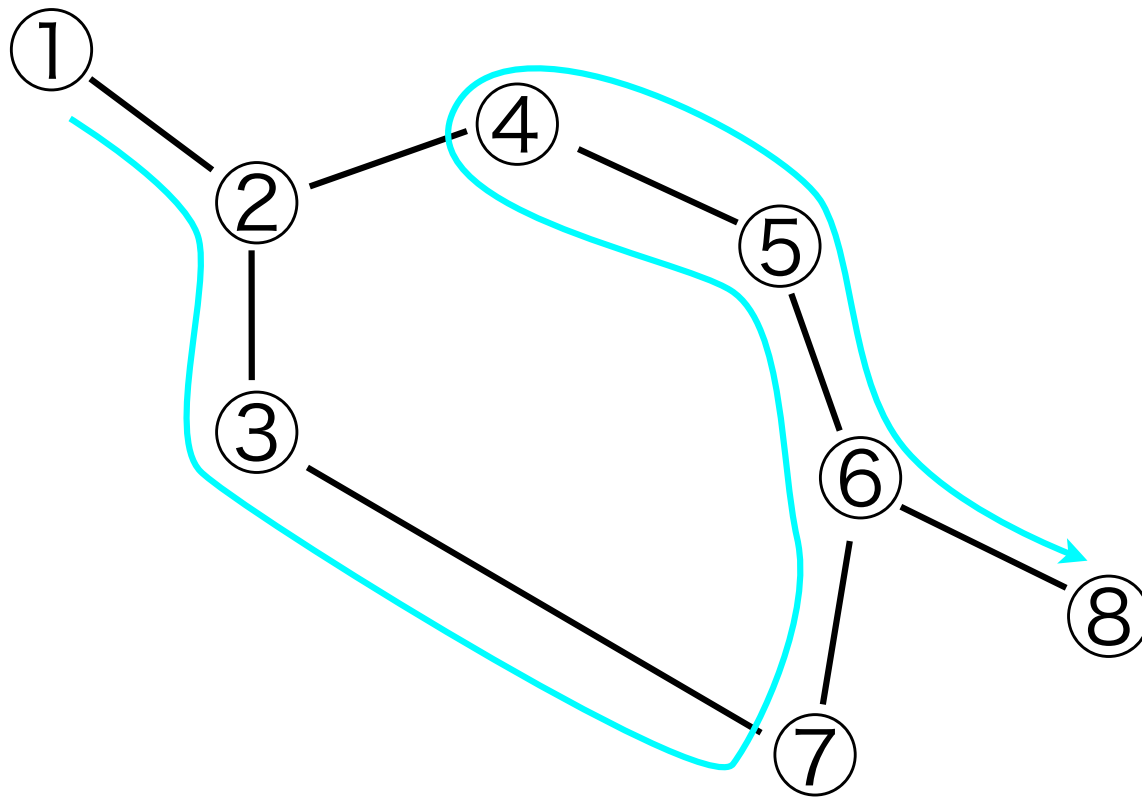


# Ackerman関数

$$\text{Ack}(m, n) = \begin{cases} n+1 & (m=0 \text{ のとき}) \\ \text{Ack}(m-1, 1) & (n=0 \text{ のとき}) \\ \text{Ack}(m-1, \text{Ack}(m, n-1)) & (\text{それ以外}) \end{cases}$$

$m, n$  の増加につれて爆発的に大きな数値になる

# グラフの探索



隣接行列

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	0	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	0	1	0	0	0	0	1	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	0	1	0	0
6	0	0	0	0	1	0	1	1
7	0	0	1	0	0	1	0	0
8	0	0	0	0	0	1	0	0

# 深さ優先探索

出発点を決めて隣接するノードの数値の若いものの順番に繋げて行く

①からは②へしか繋がっていないので②へ

②から①は既に通っているのでまず④より若い③へ

③から②は既に通っているので⑦へ

⑦から③は既に通っているので⑥へ

⑦から③は既に通っているので⑥へ

⑥から⑧より若い⑤へ

⑤から④へ

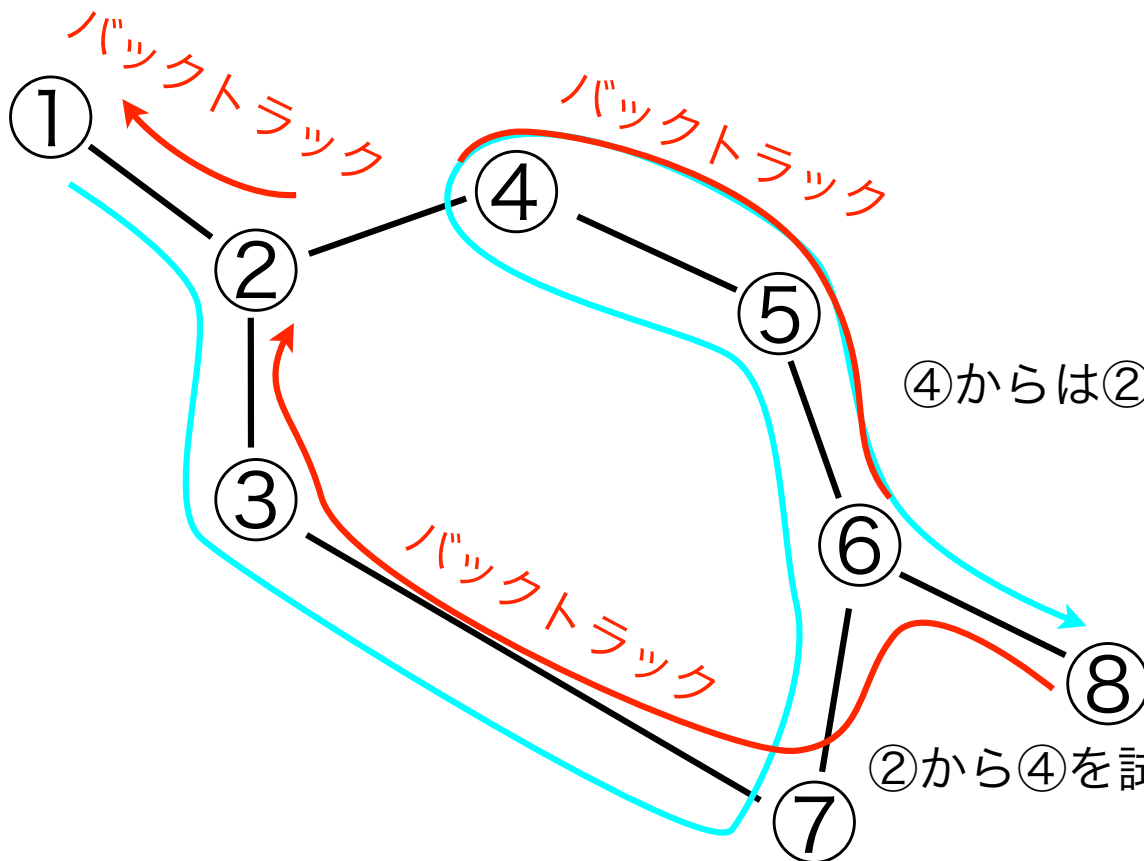
④からは②も⑤も既に通っているので行き止まり

⑥まで戻るバックトラック

⑥からまだ行っていない⑧へ

②まで戻るバックトラック

②から④を試すが既に通っているので①まで戻る



# 課題 1

ある場所で①から⑧について走査

繋がっている場合、移動を検討する

既に通っている（訪問フラグ=1）場合  
には移動しない

移動した場合にはまずその場所の訪問  
フラグを1にする

隣接行列a[][]：繋がっているノード間は1

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	0	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	0	1	0	0	0	0	1	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	0	1	0	0
6	0	0	0	0	1	0	1	1
7	0	0	1	0	0	1	0	0
8	0	0	0	0	0	1	0	0

訪問フラグ v[]：既に通った場所は1にする

	1	2	3	4	5	6	7	8
	0	0	0	0	0	0	0	0

```
void visit(int now)
{
    int next;
    v[now] = 1;
    for(next=0;next<N;next++)
    {
        if((a[now][next] == 1) && (v[next] == 0))
        {
            printf("%d->%d, ", now, next);
            visit(next);
        }
    }
}
```

今来た場所を訪問済みにする

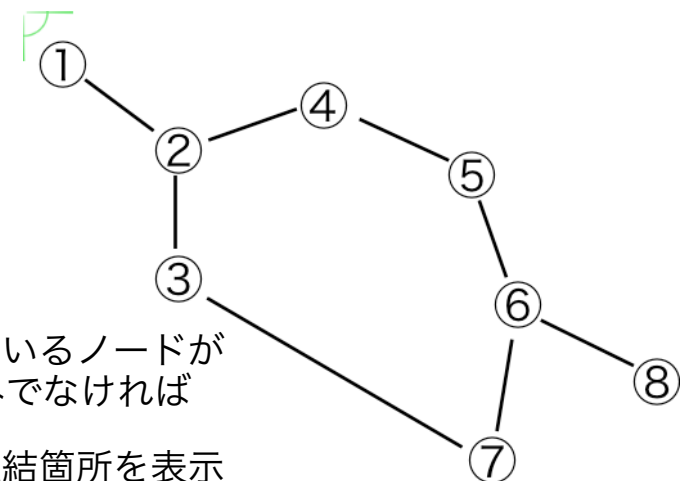
N: ノード数=8

今いるノードと行こうとしているノードが繋がっていれば

次のノードを添字にして再帰呼び出し

行こうとしているノードがまだ訪問済みでなければ

見つけた新たな連結箇所を表示



main関数で隣接行列・訪問フラグ等を定義した上で任意のノード名でvisit関数を呼び出す

①からなら②が先ず繋がっているので③以降のチェックは後回しにして（深さ優先）③へ移動

③から②へは訪問フラグが立っているので行かず、⑦へ

同様に⑦からは⑥へ⑥からは⑧は後回しで⑤へ⑤から④

④からは②へ繋がっているが訪問済みなので⑤に戻る

⑤から繋がっているノードは  
調査済/訪問済なので⑥に戻る

⑥からは⑧への訪問が未チェックで可能なので⑧へ行く

⑧からは行き先がないので⑥へ戻る

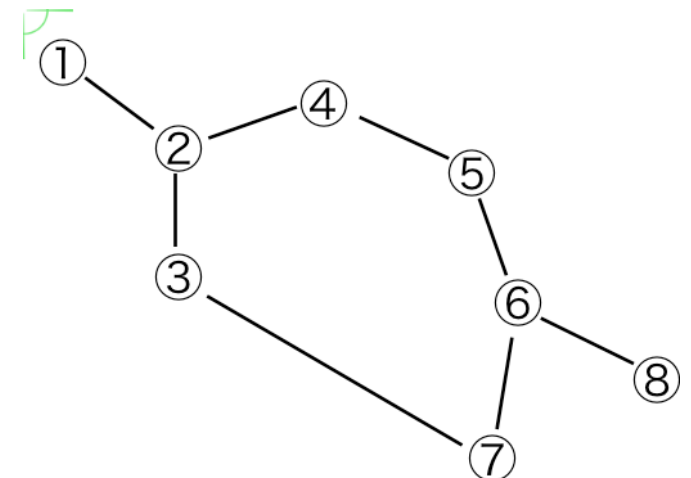
②まで戻り④が訪問済みなのをチェックして①まで戻ってmainに帰る

隣接行列a[][]：繋がっているノード間は1

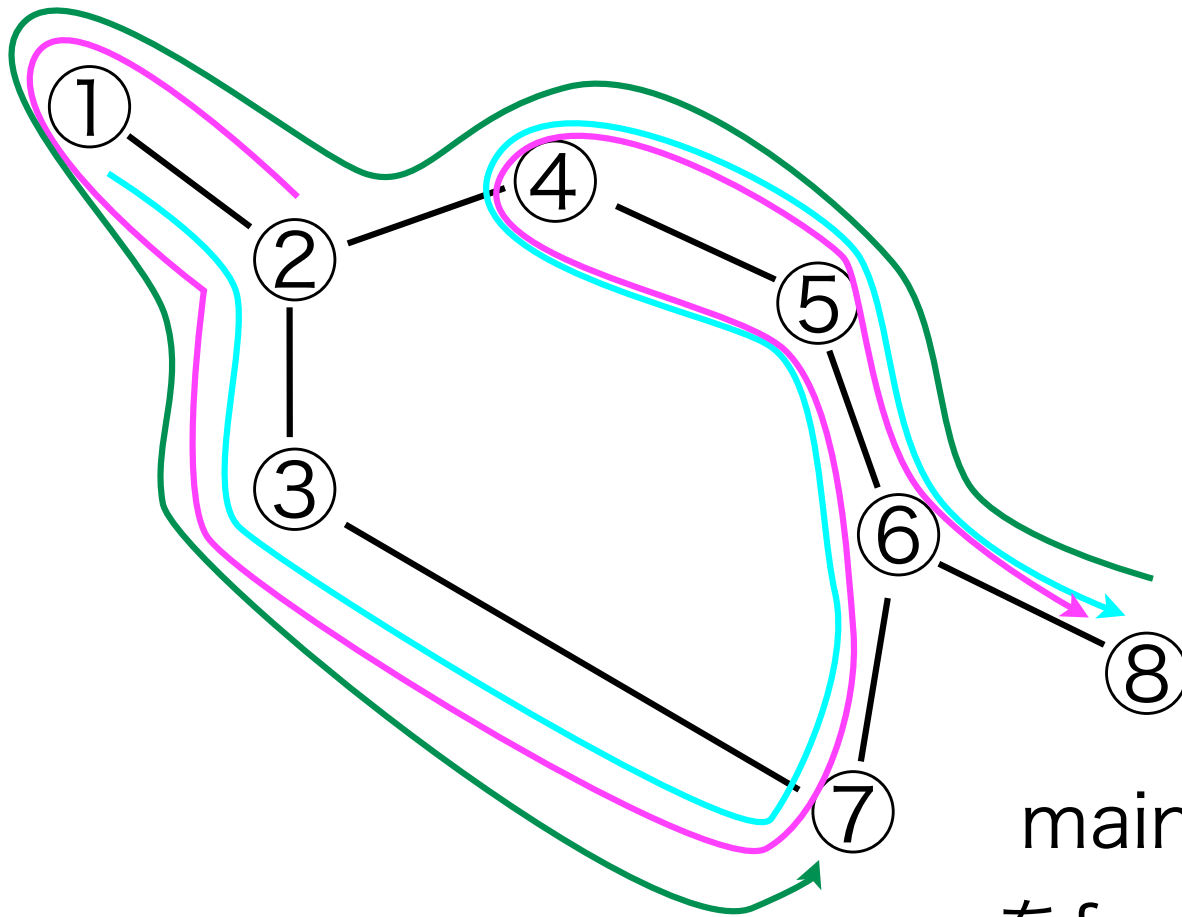
	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	0	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	0	1	0	0	0	0	1	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	0	1	0	0
6	0	0	0	0	1	0	1	1
7	0	0	1	0	0	1	0	0
8	0	0	0	0	0	1	0	0

訪問フラグ v[]：既に通った場所は1にする

	1	2	3	4	5	6	7	8
	0	0	0	0	0	0	0	0



## 網羅的探索 課題2



①を起点とした場合

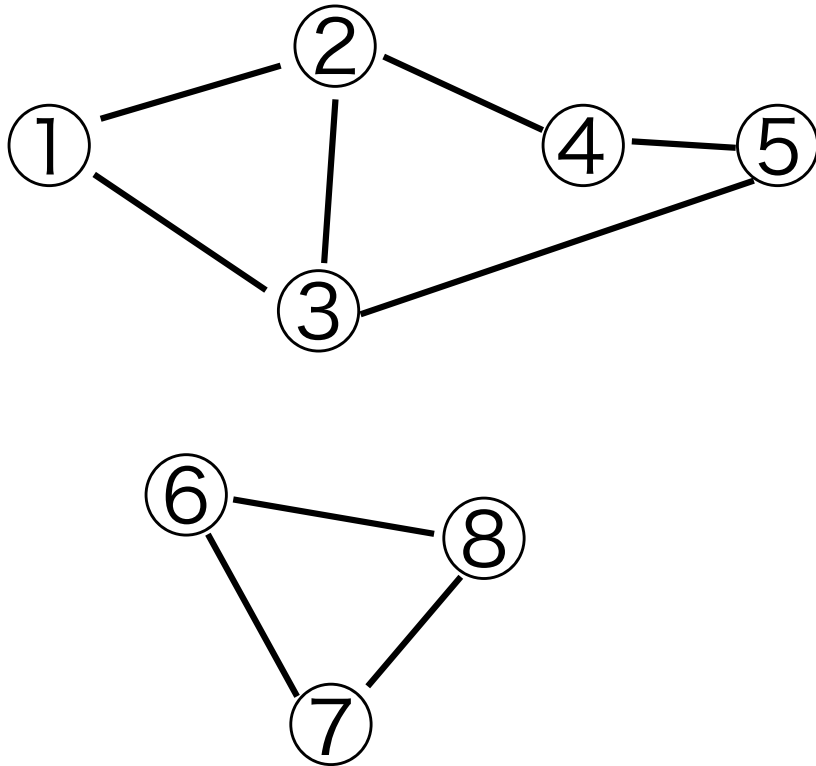
②を起点とした場合

.....

⑧を起点とした場合

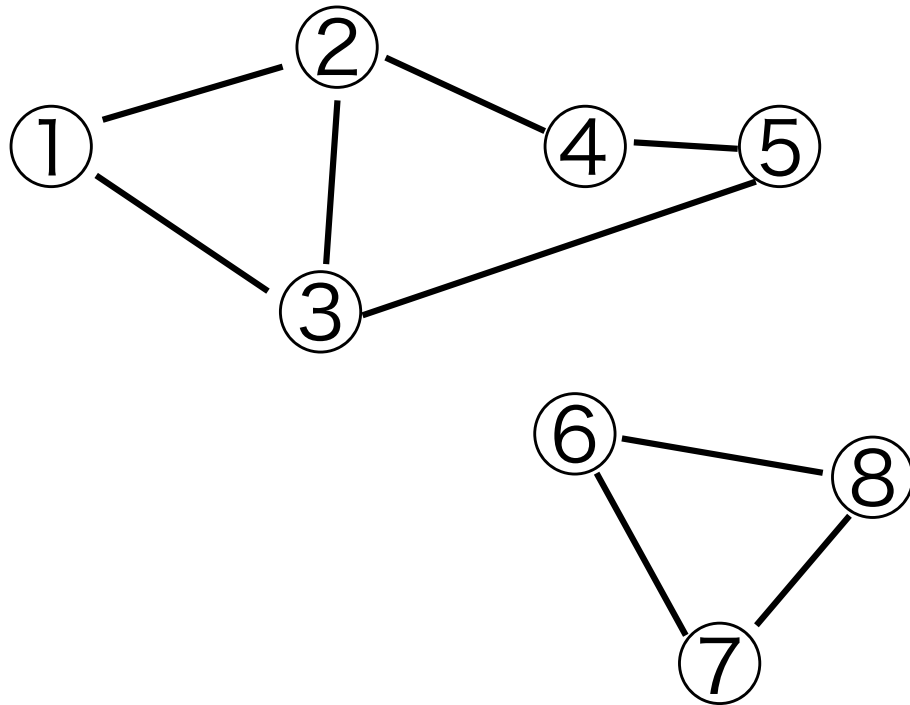
mainから呼び出すvisitの添字  
をforループで1-8に振ればよい

# 非連結グラフ 課題 3



	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	1	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	1	1	0	0	1	0	0	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	1	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	1	1
7	0	0	0	0	0	1	0	1
8	0	0	0	0	0	1	1	0

# 非連結グラフ 課題 3



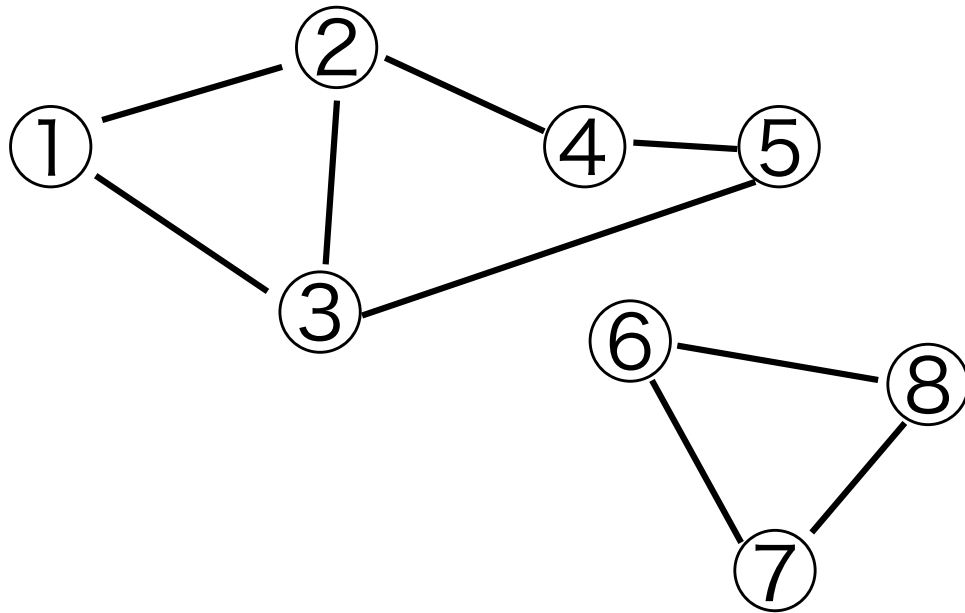
出力

グラフ 1 : 1, 2, 3, 4, 5

グラフ 2 : 6, 7, 8

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	1	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	1	1	0	0	1	0	0	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	1	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	1	1
7	0	0	0	0	0	1	0	1
8	0	0	0	0	0	1	1	0





一つ目のグラフ{①,②,③,④,⑤}

二つ目のグラフ{⑥,⑦,⑧}の要素を列挙

mainの中から、全ての未訪問のノードを起点として  
visitを試みる

	1	2	3	4	5	6	7	8
1	0	1	1	0	0	0	0	0
2	1	0	1	1	0	0	0	0
3	1	1	0	0	1	0	0	0
4	0	1	0	0	1	0	0	0
5	0	0	0	1	1	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	1	1
7	0	0	0	0	0	1	0	1
8	0	0	0	0	0	1	1	0

```

int graph_num = 1; //独立したグラフの数
for(i=1;i<=8;i++)
{
    if(v[i] == 0)
    {
        printf("Graph %d:",graph_num ++);
        visit(i);
        printf("\n");
    }
}

```

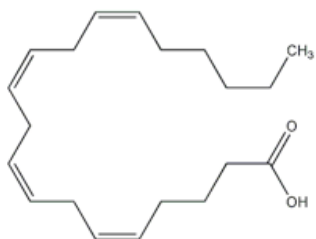
```

void visit(int now)
{
    int next;
    v[now] = 1;
    for(next=0;next<N;next++)
    {
        if((a[now][next] == 1) && (v[next] == 0))
        {
            visit(next);
        }
    }
}

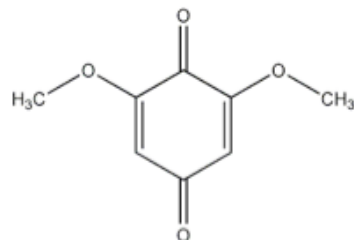
```

# 化学構造

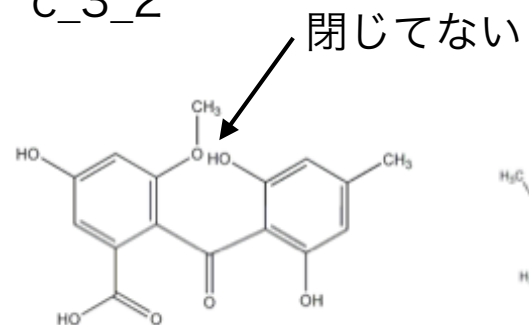
c\_1\_0



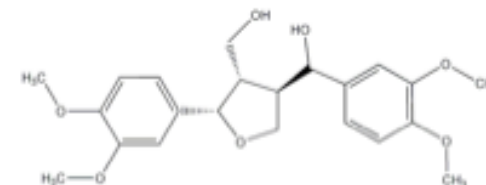
c\_2\_1



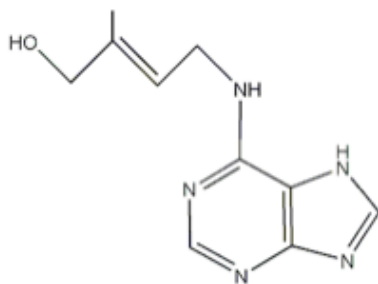
c\_3\_2



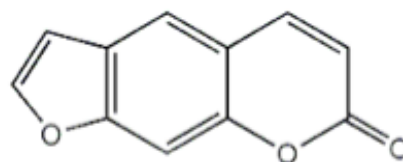
c\_4\_3



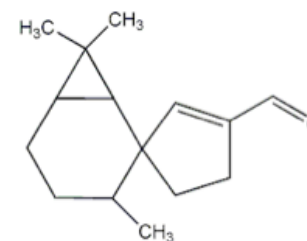
c\_5\_2



c\_6\_3



c\_7\_3

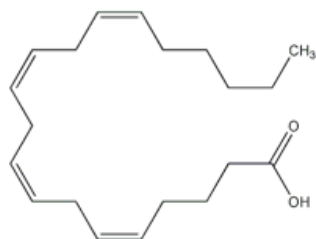


## 環を認識する

# 課題4

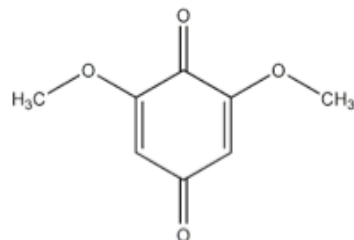
C\_PROG\_14\_04

c\_1\_0



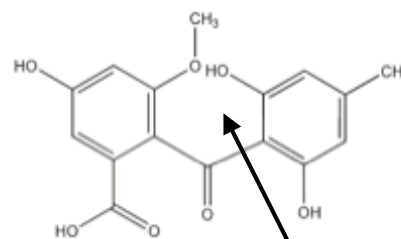
0

c\_2\_1



1

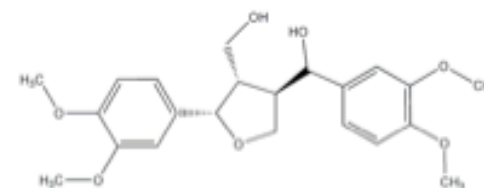
c\_3\_2



2

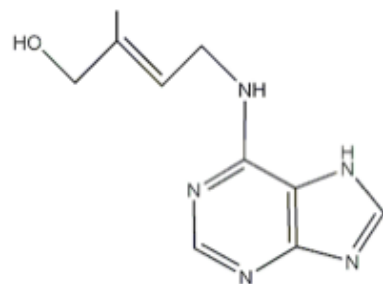
閉じてない

c\_4\_3



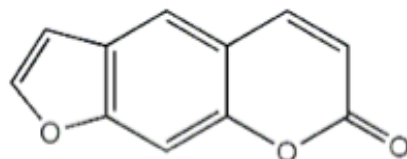
3

c\_5\_2



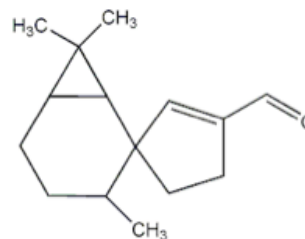
2

c\_6\_3



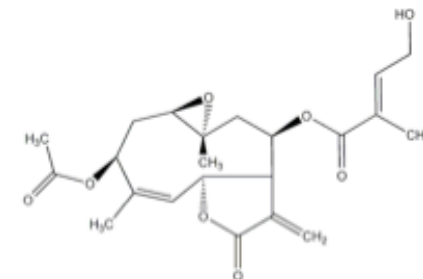
3

c\_7\_3



3

c\_8\_3



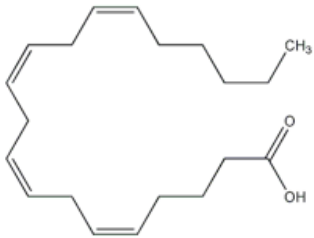
3

環の数をカウントする

# 応用課題5<sup>🌶🌶</sup>

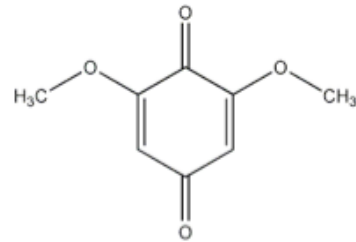
C\_PROG\_14\_05

c\_1\_0



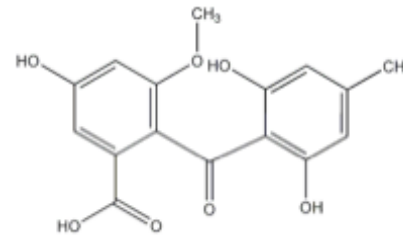
0

c\_2\_1



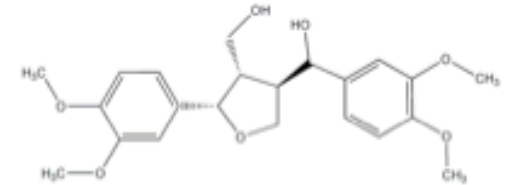
6 - 1

c\_3\_2



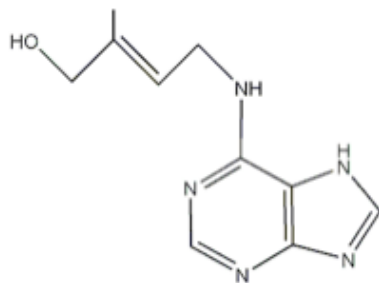
6 - 2

c\_4\_3



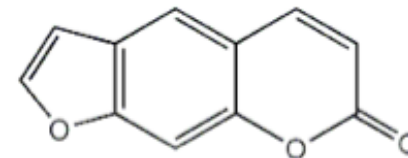
5 - 1  
6 - 2

c\_5\_2



5 - 1  
6 - 1  
9 - 1

c\_6\_3



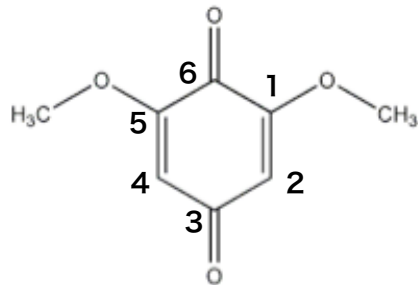
5 - 1  
6 - 2  
9 - 1  
10 - 1  
13 - 1

環の員数をカウントする

## 応用課題6

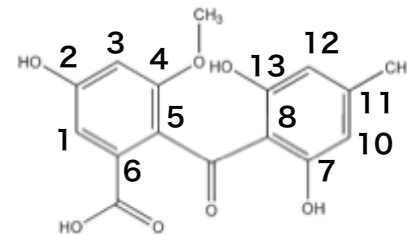
C\_PROG\_14\_06

c\_2\_1



ring1 : 1-2-3-4-5-6

c\_3\_2



ring1 : 1-2-3-4-5-6

ring2 : 7-8-13-12-11-10

環を構成する原子をリストアップする

# mol 形式のファイルを読み込む

8 回目 6/9 のプログラムを流用

## 原子間の隣接行列を作る

先週はハードコードしてあった、  
2次元配列をmallocまたは決めうち

## 隣接行列をトレースして環の部分を検出する

先週のプログラム：再帰による深さ優先探索を応用

隣接行列

二次元配列

最大の原子数で決めうち

```
connect[MAX_ATOM][MAX_ATOM];
```

MAX\_ATOM = 100 程度

ポインタの配列をとって malloc

```
int **connect;
```

# 環のカウント

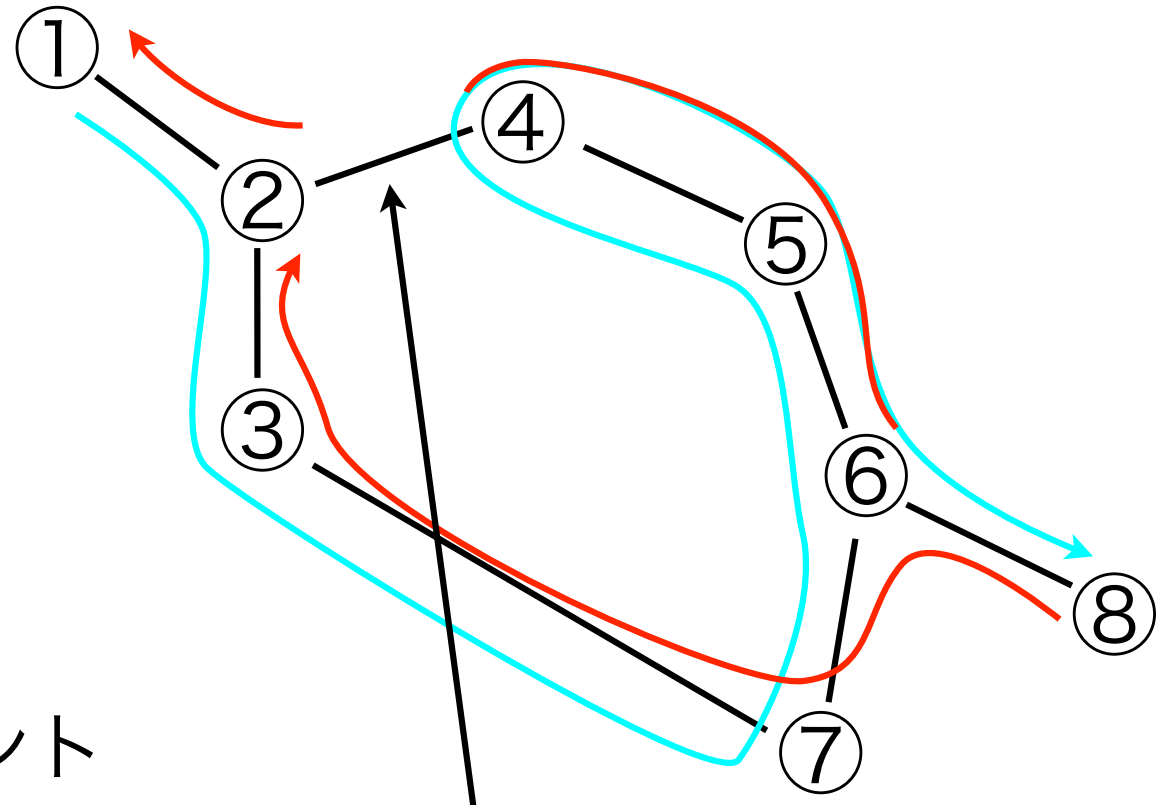
```
int n_ring = 0;
```

深さ優先探索で

④から②を試す時に

自分以外で訪問フラグ  
が立っている場合

環の数をひとつとカウント



自分以外で訪問フラグが立ってる  
場所にぶつかった時

```
n_ring ++;
```